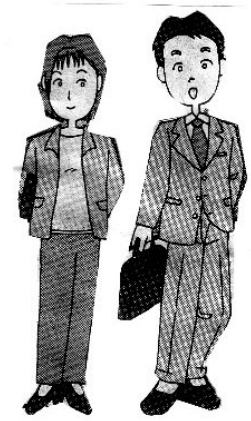
（その３４）



「君」と「僕」の ことばはいつから

幼ななじみの思い出は
　　青いレモンの味がする

閉じるまぶたのそのうら
　　おさない姿の君と僕

うえの歌詞は、永　六輔さん作詞の「幼ななじみ」の一節でよくロずさまれている歌だ。この詞のなかの「君」と「僕」ということばも、いまではどこでもつかわれていて、いまさらとりあげて何を云おうとするのかと思われるかもしれないが、これにも歴史があるわけで、前回の“さん”づけ、“ちゃん”づけを書いた以上、このことにも、触れずにはおられないのである。

1　「君と僕」のことばは、この地方では、私が子供の頃から

私が小学校へ入ったのは大正12年であるが、最初の頃は、自分のことは“わし”　友だちは“おめえ”と言っていたと思うが、村長の息子か、転校してきた同級生が、僕とか○○君とか云うことばをつかうので、しだいに皆が君・僕をつかうようになったと思う。（註・小学校で3年生までは、女の先生が担任であったから、男の子でも“さん”づけで呼ばれ、“君”づけで呼ばれることはなかった。）

私の父は、学校の同級生だった友達を、○○君と呼んでいたようだが、自分を、僕と云っているのは聞いたことがない。また、近所の年配の人も当時、僕ということばはつかわなかったように思う。

2　「君と僕」のことばを教わった“藤村”

島崎藤村著わす「生ひ立ちの記」によると、明治5年（1872）長野県木曽郡で生まれた藤村が、明治14年9歳のときに上京して、姉の婚家先へ寄寓し小学校へ転入することになる。……私の故郷の習慣で、他の朋輩を呼ぶには「わりゃ」と言ひ、自分のことはどんな目上の人の前でも「おれ」でしたが、その時都会の少年のやうに言葉遣ひを習ひ、「君」とか「僕」とかいふ言葉も姉からをそわりました。…と書かれている。（註・……内は、著書原文のままとした。だから、旧仮名遣いである。）

君と僕ということばは、東京の方では、明治の初めにもう使われていたことが知られる。そうだとすると、このことばがこの地方まで普及するには何十年もかかっているわけで、新聞やラジオ・テレビなど情報通信の発達普及した現在では考えられない

ようなことだ。

3　君と僕のことばを、明治以前に使った人がいる。

幕藩時代、四民の最上位に君臨していた武士たちは、自分を「拙者」と言い、相手を「貴殿」と呼んでいたであろうと思うのだが、江戸末期、かの尊王の志士吉田松陰（1930～1859）は、そのようなことばを、ふだんは、あまりつかわなかったらしい。

松陰は、長州藩内はもとより他藩の人とも交際が広く、それらの人々と交わした大変多くの書簡を残しているが、その中で自分のことは「僕」と書いている場合が多く、同輩以下の相手には、「君」ということばをつかっている。例えば松陰が、野山獄の獄中から、9歳年下の門人高杉晋作（1839～1867）にあてた手紙（安政6年）に「…僕は君に負き父に負くの人…」というような字句が見られる。（註・君にそむき、父にそむくの人とは、父や晋作の期待をうらぎり、当時の国法を犯してアメリカ行きを企て、獄舎につながれるようになった自分という意味であろう。）

司馬遼太郎さんの「役人道について」という論文（文芸春秋所蔵）のなかで…桂小五郎（木戸孝允－1833～1877）は士分でありましたが、元来足軽身分とも言いがたかった時期の伊藤俊輔（伊藤博文―1841～1909）に対して「君と僕とは対等である」として上下の礼をとる必要がないといっている…と書かれている。つまり、君と僕という表現は、お互いが対等であり同志であることを意味していたわけである。

吉田松陰がつかった君と僕ということばにもそのような思想がふくまれていたにちがいない。したがって、松陰門下生たちも、同志の一人として、進んでこのことばをつかったことが想像される。

明治維新によって、士・農・工・商という階級的身分社会が崩落し、四民平等の社会になってみれば、サムライだったからといって、「おい、そこな町人※」などと呼び捨てにできないし、百姓・町人だからといって、元士族を「おサムライさま」とたてまつる必要もなくなってみれば、長州で発明された「君」と「僕」が新語として登場し、一般化するのも、必然であったといえようか。（※司馬遼太郎著「風塵抄」P80）

いまあたりまえのこととしてつかっている、「君」と「僕」ということばも、維新時代の流行語（？）であったと、私は言ってみたいのである。

ただし、国中に普及するには、相当の年月がかかったが…。

平成9年10月号　第44号

（　中　尾　　佐之吉　）